

## はじめに

今日の邪馬台国論で言及すべき事項は、以下の諸点であると思われる。第一は、邪馬台国への道程とその位置であることは言うまでもない。第二は、考古学の成果を踏まえ「卑弥呼の墓」、「卑弥呼の鏡」に関する解釈を行うことである。第三は、邪馬台国と大和王権との関係性であり、邪馬台国の成立から大和王権の成立に至る経緯を考えることである。

以下、試論を述べる。

## 1. 倭国乱と卑弥呼共立

### (1) 倭国乱

松木 武彦は、地球環境の変動が歴史を動かした力をもっと評価する必要があるとし、人類は、又、日本人も時に激しく変化する地球上の環境に、できる限り適応するように様々な形の社会を作ってきたと言う。気象学者の山本 武夫は、一世紀後半から三世紀前半にかけて世界の気候は、小氷期の谷間にあり原始農業の稲作、養蚕は、南の温暖気候を必要としたと言う。鉄器の普及が進んでいた北九州では、可耕地がほとんど開拓されていた。可耕地は狭く収量を高めるため、温かい地を求めて南進した。結果、北九州西部勢力、北九州東部勢力、及び、南九州勢力との間で可耕地をめぐる争いが生じた。ここで北九州西部とは、奴国や伊都国がある地域であり、北九州東部は、遠賀川流域の地域で両地域は三郡山地で限られている。又、南九州は、狗奴国のある地域である。近畿では、鉄器の使用が遅く、普及が進んでいなかったため未開の地が多くあった。比較的可耕地が広いことから、鉄器の活用を加速し収量の増大化を図った。鉄の入手には、北九州等との対外活動が不可欠であり、対外活動に力ある首長に権力が集中したため、地域内の首長の再編と階層化が進んだ。

大陸では黄巾の乱(184~192年)が起こり、楽浪、帯方郡の力が弱体化し、混乱した大陸、半島の情勢の下、北九州勢力の鉄等の入手は、困難になっていった。半島と九州間の航海、交通の権益をめぐる北九州西部、東部両勢力との間で争いが生じた。

以上、気候変動を主因として九州で北九州西部勢力、北九州東部勢力、及び、南九州勢力との間で争乱が起こった。「魏志倭人伝」が伝える倭国乱である。

### (2) 卑弥呼共立

九州では、いわば三国分立状態にあったが、二世紀末に北九州西部、東部両勢力は、卑弥呼を共立し連合した。以降、九州は南北勢力による二国分立に移行した。

平野 邦夫の言うように、この時代には広範囲の国々による卑弥呼の共立は、政体的、政治的に難易度が高く、近畿を含めた共立は纏まりが付き難い。黛 弘道は、古代の大和を地政学的に分析し、「大和は南北、東西は、政治的条件あるいは地理的条件によって局限されており、「魏志倭人伝」の 29 国の盟主としての邪馬台国をこの地に想定することは無理と思われる。」と言う。(大和盆地の諸河川は、一度この盆地の真ん中にある湖に集まり、そこから西の方、河内方面に流出していた。大和郷は大國魂神社の 3km 北に物部氏の氏神がある石上神社、5km 南は大神氏の氏神がある大神神社、東は古墳の多い丘陵地帯、3km 西は上記の湖沼地帯がある。)。二世紀末の段階におけるヤマトの力は、北部九州を勢力下に置けるほど強くなかった。北九州両勢力は、①都は、可耕地を避け西部、東部両勢力の中間点である三郡山地周辺に置き、②女王は、伊都国女王の血筋を引く卑弥呼を立てることに合意し終戦に至った。

伊都国の地にある平原一号墳は、弥生後期末の 200 年前後に造られ、埋葬品は、鉄製武器がほとんどなく、粉々に壊された銅鏡 40 面、瑪瑙製管玉、ガラス製耳飾り、勾玉、小玉多数、素環頭太刀一口等であった。埋葬品の特徴から被葬者は、伊都国最後の女性祭司王と考えられている。卑弥呼の代に女王が伊都国を離れ邪馬台国に移動したことにより、伊都国

は「世々王あるも、皆女王国に統属す。」ことになった。平原一号墳の被葬者女性祭司王→卑弥呼→台与と続く代々の女王は、”鬼道”を基本祭祀とした。

## 2. 邪馬台国への道程

### (1)論説上の問題点

「南、投馬国、水行 20 日、南、邪馬台国、水行 10 日陸行 1 か月」の解釈について、邪馬台国畿内説は、方角が間違いとして南を東に変え、水行、陸行の距離を正しいとする。一方、邪馬台国北部九州説は、方角を正しいとみて距離を間違いとする。この極めて長い距離に関して先人達は、以下のように言説した。

白鳥 庫吉は、自国を防衛するために倭人が故意に遠方にあると告げた。

松本 清張は、陳寿が呉の背後に倭があるとして戦略的に呉を牽制した。

橋本 増吉、大和 岩雄は、ヤマトの地への道程の反映があるとして、東征説、あるいは東遷説を主張した。

その他、倭の風俗、風物に会稽東冶等南方のそれを合致させるため陳寿が改変した。

等々、諸説がある

思うに、魏の使者は、往時の日本列島の形の認識がどうであれ、起点となる出発地における東西南北の方角に関しては、正確に認識していたはずである。又、水行、陸行という交通の手段に関しては、間違いようもなく正確に伝達していると思われる。この距離の長大さに対する解釈については、本稿の中で明らかにして行きたいと考える。

### (2)不弥国、投馬国への道程

鳥越 憲三郎は、「遠賀川は、古くは河口から 20km 程、現在の直方あたりまで入海となっていたが、縄文時代に潟となり、弥生時代になると縮小されるものの、それでも広大な潟を形成していた。」と言う。奴国から東へ進むと、古の遠賀潟のほとりに行き当たる。この地が不弥国で「日本書紀」の言う崗県の崗浦港にあたる。不弥国から遠賀潟(川)を南に水行し、交通上の要地である直方に至る。遠賀川は、直方で飯塚方面へ流れる本流と田川方面へ流れる支流に分かれる。この直方、飯塚、田川の遠賀川流域一帯が投馬国にあたる。門脇 禎二は、「日本書紀 仲哀紀 8 年条」の分析から、北九州東部の勢力は、下関海峡を九州側から扼して瀬戸内海にかけての海上を支配し、又、後背の遠賀川一帯の稲作農耕集団も支配していた存在であったと言う。立岩遺跡に代表されるように、この一帯は古くから栄えていた地であり、北九州東部勢力は、不弥国、投馬国を中心に一体となってこの地を支配していた。

### (3)邪馬台国への道程

遠賀川を南に水行し、投馬国内の立岩遺跡のある飯塚に至る。ここから陸行し三郡山地の八木山峠の麓の筑前山手に至る。ここが卑弥呼の都で、邪馬台国の地にあたる。奴国から多々良川沿いに約 10km、又、投馬国の要地、立岩遺跡から約 10km の中間点に位置する地である。卑弥呼はあくまでも鬼道者であり、「観星、望氣を以って禍福、吉凶を占い、安泰と豊穰祈願を為す」とする祭祀に、婢千人と共にたずさわった。都は、楼観を主たる施設とした高台の祭祀拠点に過ぎなかった。婢千人程度が居住する”山の手”にある、小地域の呼称が邪馬台国である。

## 3. 邪馬台連合国への近畿勢力加盟と魏への遣使

### (1)近畿勢力加盟の動機

公孫氏は、190 年に遼東、玄菟の二郡を領有し、204 年に楽浪郡を分割して帯方郡を設置した。210 年頃に、韓、濊を討ち、帯方郡を安定化させて、韓に流入していた遺民を帯方郡に復帰させた。公孫氏政権が安定した結果、倭と半島との交易が復活した。この時期、近畿勢力は邪馬台連合国との交易によって、急速に増大した鉄、及び、銅鏡の需要を充足した。

福永 伸哉は、「中国では二世紀後半から三世紀にかけて神獸鏡が大変な流行をみせる。後漢後半期の混乱する社会のなかで、人々が不老長生を求める神仙術に希望を託そうとした思想的流れと無縁ではなかろう。画文帯神獸鏡もそうした状況のなかで生まれた。」と言う。近畿では三世紀前半、銅鐸祭祀に代わって神仙思想が急速に広まっており、神獸鏡は、神仙思想に欠かせない宝器として人々が希求したものであった。

220年以降魏の南下策が展開され、半島の情勢は、急速に悪化した。このため、近畿勢力にとって不可欠な鉄、神獸鏡の入手は、困難を極めた。238年の魏による公孫氏討滅と楽浪郡、帯方郡接收を機に、近畿勢力は、瀬戸内西部に力を持つ北九州東部勢力を通じて邪馬台連合国に加盟し、鉄、神獸鏡を安定的に確保しようとした。近畿勢力は、「倭の女王、大夫難升米等を遣わして都に詣で、天子に詣で朝貢せんことを求めしむ。」とある239年の魏への遣使に邪馬台連合国の構成国として加わった。

## (2)境界領域の官と大倭の設置

石母田 正は、境界領域の官として、邪馬台国の「大率」、「大倭」、推古朝の「筑紫大宰」を、又、大化改新期の東国の「総領」をあげる。大率は、伊都国に常駐する官で北九州の行政と軍事の掌握、及び、倭国の外交事務を行うために派遣された官である。大率は、卑奴母離を組織下に置き対馬、一支、奴、不弥、伊都の沿海五国に渡る防備を担ったと平野 邦夫は言う。(伊都に卑奴母離がないのは、大率が兼ねたとする。)卑奴母離は、対馬、一支の両島、及び、奴、不弥の島々に置かれたと思われる。即ち、奴の志賀島、不弥の宗像大島(中津宮)、又は、地島が候補地にあたる。邪馬台国は、島々に連なる防衛線を引き大陸、半島、及び、邪馬台連合国以外の列島勢力に対して、常時備えていた。

大倭については、「租賦を収むに、邸閣有り。国々に市有り、有無を交易し、大倭をしてこれを監せしむ。」とある。石母田 正は、「国々に市有り」といわれる場合の「市」がそれぞれの国の内部の分業と交換の場としての「市」でなく、国々間の、あるいは倭国と朝鮮、中国との間の交換の場としての公的な「市」であることは、女王がそれを制御しようとしている事実からも明らかであると言う。大率が、大陸、半島との交通上の重要地域に設置されたと同様、大倭は、東国との交通上の重要地域である近畿に設置された。近畿は、邪馬台連合国の東方境域であり、大化改新期の大和王権の東方境域東国と類似した関係にある。大倭は、近畿に単独で設置されたものと考え、諸国に設置された中の一つであったとしても、近畿の大倭は、邪馬台連合国にとって特別重要なものであったと思われる。大倭は、近畿地域の国々、及び、東国を対象に鉄、銅鏡等の交易管理を行った。

景初3年の遣使に大夫難升米、次使都市牛利とあるが、難升米は、大率、都市牛利は大倭の高官として派遣されたと思われる。都市とは、古く中国で市を統べる官の呼称であると吉田 孝は言うが、従うべきと考える。大倭(ヤマト地域の官)の都市(職称で官名)の牛利(名前)であり、西方の境界領域に置かれた大官、大率と共に、東方の境界領域に置かれた大官、大倭が魏へ派遣されたと考える。大倭の設置は、近畿勢力が邪馬台連合国に加盟するための必須条件であった。この時期、邪馬台連合国は、鉄、銅鏡の供給を全面的に差配しており、これに対しては、当時の近畿勢力は無力であったからである。

大倭は、纏向の地に置かれた。一帯が古代の大市郷であり、大市と書かれた墨書土器片が出土している点、又、水運を担った大溝の遺跡がある点、広範囲の地域の土器が出土している点等から纏向の地への大倭設置がふさわしい。(出土土器は、纏向以外のものが、15%あり、瀬戸内、山陰、北陸、伊勢湾地域のものが多い。一部、南九州、南関東のものも出土している。) これ以降纏向は、商都として、又、一大物流拠点として栄えて行った。

## 4. 考古学の成果についての解釈

### (1)卑弥呼の墓

「魏志倭人伝」は、卑弥呼の墓について「大いに冢を作ること径百余歩、」 「葬に徇ずる者

奴婢百余人なり。」と記す。このことから卑弥呼の墓の要件は、①三世紀前半から中頃に築造されたこと。②大きさは、150m 前後であること。（「歩」は西晋の頃の長さの単位で 1 歩 150 cm）③多数の殉葬の痕跡があることである。邪馬台国畿内説では、箸墓古墳、ないしは、石塚等、纏向地域の初現期の墳墓が卑弥呼の墓であったとするが、いずれも前方後円型の墳墓であり円墳とは異なる。又、規模も前者は径 280m、後者は径 100m 前後であるため合致しない。円墳では、後代の埼玉古墳群丸墓山が径 100m(高さ 19m)で全国最大級であるが、それでも 150m との間に大きな差がある。北部九州でも時期、規模の要件を満たす墳墓は、発見されていない。又、殉葬者が見つかったとする例は、全国から報告されていない。従って現時点で卑弥呼の墓の要件を満たす墳墓は存在しないと言える。

森 浩一は、古代中国の墳墓造営思想の推移に着目し、「卑弥呼の墓」に迫ろうとした。即ち、秦、前漢、後漢は、概ね厚葬であり、魏は、徹底した薄葬、西晋、南朝は、概ね薄葬であり、北朝では、北魏になり厚葬が復活し、隋、唐へ受け継がれていったとする。次いで魏の文帝が会稽に葬った禹の先例を引き、「農民は農地を変えなくてすんだ。山林に葬れば山林と一つになる。盛り土をして樹を植えるやり方(封樹の制)は、上古には、無かったことで、自分は採用しない。自分の寿陵は「山により体をなす。」と述べたことをあげた。

私見は、上記の森 浩一の見解を踏まえて以下のように考える。可耕地が狭く、丘陵には集落と墓地が密集していた北部九州では、低地に大きな墳墓を造る余地はなかった。邪馬台連合国は、薄葬の魏の影響を受け、低地を避けて三郡山地に卑弥呼を埋葬した。今後、卑弥呼の墓の要件を満たす墳墓が発見されることを期待したい。

## (2)卑弥呼の鏡

魏は景初 3 年の卑弥呼の遣使に因って、正始元年に銅鏡百枚を賜与した。景初 3 年紀年銘鏡が二種二面、景初 4 年紀年銘鏡が一種二面、正始元年紀年銘鏡が一種三面出土している。鏡種は、画文帯神獸鏡一面、盤龍鏡二面、三角縁神獸鏡四面と多種に渡っている。近畿勢力が、邪馬台連合国に加盟した動機の一つは、神仙思想に不可欠な祭具である神獸鏡の安定確保であった点から、魏への遣使を通じて神獸鏡の入手を強く要請したものと考える。魏は当代の神獸鏡の代表鏡種である画文帯神獸鏡を取り揃えたが、近畿勢力が、更なる増量を求めたため、魏は、不足分を急ぎ帯方郡で製作させた。これらの鏡が紀年銘鏡であり、帯方郡の工人は、大きさや文様を変え試作的に多種の鏡を製作した。呉は 232 年公孫淵を燕王に封じ、233 年に「衆万人」を率いた使者を海路で遣わした。寺沢 薫は、この呉の衆の中に鏡作り工人がいたと言う。この呉出身の工人が、帯方郡で紀年銘鏡を製作したことは、ありうることだと思う。

岡村 秀典は、前期古墳出土の画文帯神獸鏡、及び、初期製作の三角縁神獸鏡が、大和を中心に分布することから、邪馬台国は大和であったとする。しかし北部九州に神獸鏡の出土がほとんどないのは、そもそも神仙思想が普及しなかったためであると考えられないか。神仙思想は、時間をかけヤマトから同心円的に普及した。製作時期の先行する画文帯神獸鏡の出土がヤマト、及び、ヤマトのごく近い地域に分布し、次いで三角縁神獸鏡の出土が、更にその外側の地域に分布していることが、このことを示す。北部九州は、平原一号墳の被葬者女性祭司王→卑弥呼→台与と続く”鬼道”をあくまでも基本祭祀としたため、神獸鏡の普及が遅かったか、又は、普及しなかったか、いずれかである。

## 5. 初期大和王権と丸瀧氏

### (1)中平刀と丸瀧氏

北大和の地域に東大寺山古墳群があり、古墳時代前期に墳丘長 140m の東大寺山古墳が造営された。この古墳から後漢末中平の紀年銘を持つ金象嵌銘文の鉄刀が出土した。中平は、184 年～189 年にあたり倭国乱の時期に重なる。一昨年に国宝となった「中平刀」は後漢から直接か、又は、公孫氏経由で邪馬台国の卑弥呼に下賜されたと考えられている。約 150

年間に渡って伝世された後、埋納されたことからみて、この刀は、この地の豪族にとっていかに貴重なものであったかが判る。この東大寺山古墳群を築造した氏族は、丸邇氏とみられている。丸邇氏については、岸 俊男の考察が通説となっている。一族の本拠地は、大和国添上郡和爾(天理市和爾町)で北大和に勢力を張ったとする。この地は、東国、北陸、丹波、吉備の四道に通じる交通の要地であった。一族には、春日、大宅、柿本等があり、大王家の外戚氏族として多くの后妃を出した。天武朝の「八色の姓」朝臣賜姓では、大三輪君に次ぐ第二番目の序列で大春日氏が賜与された。丸邇氏は、このように朝廷と密接な繋がりを持っていた。宝賀 寿男は、氏族の在り様を分析して、丸邇氏は、奴国末裔の海神族の主流であり、安曇氏を配下に持った氏族であると言う。丸邇氏は、北部九州から起こり海人族として活躍し、その後、大和の地に進出し土着したものとする。「古事記」「日本書紀」は、崇神の命で丸邇氏の遠祖日子国夫玖命が、將軍大昆古命と共に北大和、南山城、南河内を舞台に、反逆者の建波邇安王を討ち取る古事を特記している。

## (2)崇神の在位年代

崇神は、「古事記」「日本書紀」が伝える系譜、及び、和風諡号の分析からイリヒコ系譜として復元され、おおやまと地域の王墓、あるいは宮居の伝承と結びつけられ、初期大和王権の初代大王として比定されてきた。従来の通説では、定型化した古墳の出現年代は、四世紀初頭であり、初期大和王権の王墓は、おおやまと地域に順次、築造された前方後円墳とする。箸墓(墳丘長 280m)、西殿塚(同 234m)、行燈山(同 242m)、渋谷向山(同 310m)の順に造られたとする。次いで四世紀後半に北方の佐紀地域に移り、順次、五社神(墳丘長 276m)、陵山(同 210m)、石塚山(同 220m)の前方後円墳を築造したとする。「古事記」の記す崩年干支は、課題があるとしながらも、崇神の崩年干支を 318 年に置いた上で、この古墳の編年に基づき崇神は、四世紀前半に在位し、おおやまと地域の王墓に埋葬されたとする。

近年、箸墓古墳に代表される定型化した古墳の出現年代は、箸墓古墳の試掘調査、三角縁神獣鏡の研究、年輪年代法による研究等から、庄内式の最新段階であることが明らかになり、その暦年代がいつかが争点となっている。定型化した古墳の出現年代は、従来考えられていた四世紀初頭ではなく、三世紀中葉～後半、暦年代で 260 年～280 年とする見方が主流となっている。寺沢 薫は、箸墓古墳の濠の最下層や盛土(濠の堤)の下などから、古式土師器(「布留 0 式」)が多数出土したことから、箸墓古墳の築造は、「庄内式」の時期まで遡らないとし、暦年代として 280 年(～300 年)をあてた。又、岸本 直文は、三角縁神獣鏡の製作者集団の系統を分析し、神像、獣形の表現法から製作時期は、第一段階～第四段階、及び、仿製鏡の一段階に区分できるとした。第一段階のものは、239 年、240 年の紀年銘を持つものが含まれることから、240 年前後に製作されたと考えられる。出現期の前方後円墳の中に、第一、第二段階の三角縁神獣鏡を併せて出土したのものがある。兵庫 西求女塚古墳、吉島、権現山 51 号、奈良 黒塚、滋賀 古富波山、雪野山、愛知 奥津社(伝)等である。このことから、出現期の古墳の築造年代は、三世紀の中葉(260 年頃)であるとした。又、年輪年代法による研究が進み土器、及び、古墳の編年が見直されるようになった。池上曾根遺跡の弥生中期後葉(弥生Ⅳ期)の大規模な掘立柱建物の柱材二本の年輪年代は、紀元前 52 年、56 年に比定された。このことは、弥生後期(弥生Ⅴ期)の始まりの年代が、従来の年代より百年ほど遡って、西暦紀元前後であることを示すことになる。これに伴い、弥生Ⅴ期に続く庄内式の年代、更には古墳の出現年代も遡ると考えられるようになってきた。

崇神の崩年干支を 318 年とし、古墳の出現年代を 260 年とした場合、垂仁以降の王墓が、又、280 年とした場合、景行以降の王墓が、おおやまと地域に比定できないように思われる。崇神の崩年干支が、258 年であるとすれば、垂仁以降の崇神王統の王墓が、おおやまと地域の王墓に比定でき、近年の考古学の研究結果と良く整合するように思われる。崇神は、三世紀中頃に在位し、王墓は、石塚等の纏向型前方後円墳の中にある蓋然性が高い。

### (3)崇神朝と建波邇安王の反逆

「古事記」は、崇神の事績として、祭祀を整え、課役の制を定め、池溝を造り、将軍派遣による周辺の平定により、大和王権の基礎を据えたことを記す。「日本書紀」も、又、概ね同じ記事を12年条まで連ねている。次いで17年条で船舶造りを記すが、その後は、48年条、60年条、62年条、65年条と散発的に記し、68年条で崩御を記す。「古事記」「日本書紀」の共通性を重視すれば、崇神の時世は、約20～30年間と考えられる。邪馬台連合国に加盟し239年の邪馬台連合国の魏遣使に参画したヤマトの王は、崇神であった蓋然性が高い。一方、卑弥呼は、丸邇氏を大倭に任命し、“節刀”として「中平刀」を与えヤマトに派遣した。建波邇安王の反逆は、近畿勢力が邪馬台連合国へ加盟し、大倭を設置したことに関連した争乱であった可能性が高い。開国し新政策を進める崇神勢力と守旧派勢力による争乱は、画期的な大事件であった。このため人々の記憶に長く留められ、古事となったと考えられる。大倭のヤマト設置以降、邪馬台連合国は、大倭の丸邇氏を通じて先進技術を用い、主導的に纏向の地を開発していった。又、建波邇安王の乱に介入し争乱を収束させたことから、その後、近畿に大きな力を及ぼすことになった。以上、大倭の設置は、ヤマトの崇神、及び、邪馬台連合国の卑弥呼、丸邇氏により進められたともと考えられる。

## 6. 沖の島「海北道中」と邪馬台連合国の分裂

### (1)沖の島「海北道中」の開発

一昨年、世界遺産に登録された沖の島は、対馬と北九州東部を結ぶ線状にある玄海灘の孤島である。「海の正倉院」と称される程、豊富な祭祀遺物を有する島として知られる。四世紀後半と考えられる最古の祭祀遺物は、畿内からの奉納品で構成される。このことから、この時期までに、従来の伊都国、末羅国～一支国～対馬国下島から半島に至る「魏志倭人伝」航路とは別に、北九州東部～沖の島～対馬上島から半島に至る航路が新たに開発されたものと考えられる。沖の島「海北道中」は、対馬海峡の海流が強すぎて船が流される危険があり、交易路として使えなかったとする見方もある。しかし、三世紀の邪馬台連合国時代からは、既に約100年が経過しており、航海技術は予想以上に進歩していたと考えられる。又、「南北に市糴す。」とある一支国の原の辻遺跡は、四世紀前半以降、衰退したとされる。沖ノ島「海北道中」が開発、運営された時期にあたることから、この影響によるものと考えられる。この航路の開発、運営には、北九州東部の崗の海人勢力の協力が不可欠であった。北九州東部勢力は、宇佐を中心とした豊後の海人勢力を加え、沖の島「海北道中」を運営した。宇佐に発生期の古墳が築造されている点、又、大和王権が宇佐神宮を武の神として重んじた点から宇佐と近畿勢力との緊密な関係が窺える。

### (2)邪馬台連合国の分裂

239年卑弥呼の魏遣使以後、卑弥呼から台与へ王位が交代し、大陸では265年に西晋が建国された。しかし、邪馬台連合国の外交、及び、内政は基本的に変わらなかった。266年の台与の西晋への遣使、及び、三世紀末まで続く「晋書」の東夷入貢記事(276年～291年)からみて、邪馬台連合国と西晋との交通は、継続していたと考えられる。しかし、291年以降、八王の乱等の内乱により西晋の王権は不安定となり、316年滅亡する。華北はこれ以降、五胡十六国の戦乱の世となった。半島では、313年高句麗により楽浪郡が併合され、帯方郡は滅亡する。

大陸、半島の動乱下、邪馬台連合国は匈奴国との戦いに苦戦していた。とりわけ匈奴国と国境を接する北九州西部勢力の中心国である奴国は、大きなダメージを受けていた。西晋の後ろ盾がなくなった邪馬台連合国は、求心力を失い、奴国、伊都国を中心とした北九州西部勢力と投馬国、不弥国の北九州東部勢力と結んだ近畿勢力との二大勢力に分裂し、共立された女王もその役割を終えた。

楽浪、帯方郡の滅亡を契機に強い危機感を持った、大和王権は、加羅地域に急ぎ進攻し権

益を守ろうとしたとする説がある。しかし、「狗邪韓国」は、邪馬台連合国から継続し倭に属していたことから見て、あたらないと考える。四世紀前半、北九州東部勢力と結んだ近畿勢力は、沖ノ島「海北道中」を開発し金官加羅国との交易を始めた。金官加羅国とは、「魏志倭人伝」が「其の北岸の狗邪韓国」と記す国であり、邪馬台連合国に属していた。邪馬台連合国の分裂後、北九州東部勢力と結んだ近畿勢力は、狗邪韓国を継承し半島での活動拠点を確保した。吉田 晶も又、「弥生時代以来の南部朝鮮から倭人社会への鉄などの供給は、楽浪・帯方郡の滅亡にかかわりなく行われていた。そのことが卓淳国の仲介という形をとって百済と倭国の通行が始まりえた所以でもあった。」と言う。

北九州東部勢力と近畿勢力との連合王権は、王宮を纏向周辺の地から北大和の春日の地に移した。春日の地は、丸邇氏の本貫地である大和国添上郡和爾(天理市和爾町)の後背地にあたり、丸邇氏の勢力が及ぶ地域であった。ちなみに「古事記」の開化朝に春日伊邪河宮の伝承があり、春日の地に王宮が営まれたとしても不思議でない。王墓も、又、北方の佐紀地域に移り、順次、五社神(墳丘長 276m)、陵山(同 210m)、石塚山(同 220m)の前方後円墳が築造された。王位は、引き続き崇神の王統が継いだ。通説では崇神の王統は、崇神、垂仁、景行、五百木之入日子命、品陀真若王の順に継がれたとする。この内、佐紀の地に被葬された王は、五百木之入日子命、品陀真若王、更には、次節で触れる香坂王であった可能性が高い。

## 7. 歴代大王に関する崩年干支の問題

### (1)倭の五王の崩年干支

崩年干支は、課題があるとしながら、崇神の崩年干支を 258 年とし、建波邇安王の反逆に関して上記のように考察した。ここでは、崩年干支全般に関して考えてみたい。

「古事記」に崩年干支の記載のある大王は、崇神、成務、仲哀、応神、仁徳、履中、反正、允恭、雄略、継体、安閑、敏達、用明、崇峻、推古である。一方、崩年干支の記載のない大王は、垂仁、景行、安康、清寧、顕宗、仁賢、武烈、宣化、欽明である。

津田 左右吉は、帝紀、旧辞は、継体～欽明の頃にできたとする。宣化、欽明に関しては、いわば現代であり、崩年干支の記載がないことは、当然のことと思われる。欽明以降の敏達、用明、崇峻、推古に関しては、「古事記」編纂時に記された。倭の五王に比定される履中、反正、允恭、雄略に関しては、「宋書倭国伝」の中に宋遣使の外交記事がある。崩年干支は、この外交記録の年次に基づき設定されたと考えられる。安康に関しては、遣使記事に世子とあるように、帝紀、旧辞では、大王として扱われなかった。その後、「古事記」編纂時に王統に加えられたが、何らかの理由で崩年干支が記載されなかったと考えられる。

### (2)倭の五王前代の崩年干支

外交記録と崩年干支の設定に関連があるものとして、以下に倭の五王前代に関して考察する。応神に関しては、百済「七支刀」献ずとする記事にあるように、百済等半島との外交記録がある。同様に、仁徳に関しても半島との外交記録がある。仲哀は、和風諡号の分析等から実在が疑われる大王である。「古事記」「日本書紀」では、神罰が下りその後応神朝が発足したことを記す。仲哀に関しては、その崩御が応神朝の起点となったため、崩年干支を設定する必要があったと考えられる。成務に関しては、国造、県主の設置等の地方組織の整備が、景行のそれと重複する点、及び、和風諡号の分析から実在しないとされる。景行、成務の治世年数は、それぞれ 60 年で同一であることから、崩年干支は同一である。ここでは、成務=景行として崩年干支を考察することにする。

景行の崩年干支 295 年の頃、外交記録として何があったか、又、崇神の崩年干支 258 年の頃、外交記録として何があったかを確認する。崇神に関しては、239 年の魏遣使が、又、景行に関しては、266 年の西晋遣使、あるいは、276 年～291 年の「晋書」東夷入貢記録が抽出される。崇神、景行の崩年干支は、これらの外交記録との関連で設定された可能性が高いと考えられる。初期大和王権の王である崇神、景行は、大倭の丸邇氏を通じて邪馬台国

の遣使に係わりを持ったと考えられ、このことが「古事記」の崩年干支の記載に繋がったと思われる。垂仁に関しては、実在した王であったが、特に治政中に外交活動がなかったことから崩年干支が「古事記」に記載されなかったと思われる。

尚、清寧、顕宗、仁賢、武烈に関しては、実在しない王か、実在しても外交記録がない王のいずれかであった。このため崩年干支の記載がないものと考えられる。継体、安閑に関しては、外交記録があったと思われること、又、帝紀、旧辞がつくられた時期にあたっていることから当然、崩年干支は把握されていた。以上の考察から崇神、景行の崩年干支の存在は、両大王の実在をより確かなものにするように思われる。

## 8. 大和王権の成立

### (1)百済、新羅の建国

大和王権の母体は、邪馬台連合から分立した北九州東部勢力、及び、近畿勢力であるが、政治課題は、近畿勢力の邪馬台国加盟時と同様、鉄、及び、神獸鏡の安定確保であった。鉄の需要は、纏向の大倭を通じた東国への供給も加わり、増大の一途を辿っていた。半島では、長期間(319年～342年)燕と高句麗との抗争が続いた。この間、半島南部では、高句麗の南進が停滞したことから、346年に百済が建国され、356年に新羅が建国された。弁辰地域は、次第に百済、新羅の侵入にさらされ、倭の鉄の入手は制約されていった。一方、神獸鏡の確保については、帯方郡滅亡以前までは、帯方郡に委託し三角縁神獸鏡の生産を行っていた。帯方郡の滅亡以後は、工人を近畿に招へいし直接生産を行う方式に変えた。森 浩一は、田原本町の鏡作神社の御神宝が三角縁神獸鏡の内区であることから、この地で内区、銘文帯、外区を別々に製作し合体させ完成させた名残であると言う。

### (2)応神朝と香坂王、忍熊王の反逆

「古事記」、「日本書紀」は、建内宿禰と丸邇臣の祖である建振熊命が、応神の異母兄、香坂王、忍熊王の反逆を征討したことを記す。「古事記」では、応神は、仲哀の子であり、祖父に五百木之入日子命、父に品陀真若王を持つ中日売命を娶とり、仁徳が生まれたとする。しかし、井上 光貞は、応神は、崇神の王統と異なり、この王統に入り婿したとし、崇神の王統は、垂仁、景行と継がれ、その後、五百木之入日子命、品陀真若王と継がれていたとする。建内宿禰は、波多、許勢、蘇賀、平群、木、葛城等の祖で大和西部に勢力を張ったとされる。この乱は、応神と邪馬台連合の系譜をひく丸邇臣の祖である建振熊、及び、大和西部勢力の建内宿禰が結集し、崇神王統から実権を奪い、新王統を立てたことを示すものではないか。応神は、丸邇氏の矢河枝比売を妃とし、生誕した子、宇遲能和紀郎子に次の王位を継がせようとした。このことから応神が、邪馬台連合の系譜をひく丸邇氏に、いかに意を払っていたかが知れる。この乱は、鉄の確保を目的に、建国した百済と結び半島に軍事介入しようとする、開明派の応神勢力と守旧派の香坂王、忍熊王勢力との争乱であったと思われる。

### (3)大和王権の成立

364年～366年卓淳を介して倭と百済との国交が樹立された。百済は、再び南下を強めた高句麗と抗争状態にあった。対抗策として、倭に連合国としての軍事介入を求めたもので、「大船」による半島への渡海が要件となった。投馬、近畿勢力は、奴国を中心とした北九州西部勢力を併合し、「魏志倭人伝」航路と沖の島「海北道中」航路とを運営する海人勢力を統合、結集して半島への派兵を実現した。ここに、応神に始まる大和王権が成立した。「日本書紀 仲哀 8年条」では、崗県主、伊都県主が仲哀に海路を導く姿を記す。このことは、大和王権による北部九州の海人勢力の統合、結集を示しているように思われる。372年百済からの「七支刀」の授受、391年「倭国、渡海して百済、新羅を破る。」(広開土王碑)等の年譜は、活発な大和王権の半島での活動を物語っている。応神に始まる大和王権が、半島へ軍



事介入した結果、鉄の安定確保がもたらされ、大和王権は、増大する東国等の鉄の需要に応えることを通じて、次第に倭国全体に力を及ぼすことになった。

大和王権の半島での軍事介入は、やがて五世紀での「倭の五王」による中国南朝への遣使へとつながって行く。

## むすび

本文では、歴史学、考古学の数々の通説を踏まえて、邪馬台国から大和王権成立に至る過程を考えようとした。これを基に「魏志倭人伝」が記す、不弥国から邪馬台国に至るまでの「陸行一か月、水行一か月」の長大な距離について考察すると、橋本 増吉の言説が妥当と思われる。陳寿は、太康年間(280年～289年)に「三国志」を撰述した。ヤマトは、邪馬台連合国に加盟した239年以後、纏向を中心に開発が進められ急速に発展していた。この繁栄したヤマトの状況は、邪馬台連合国の太康年間も含めた遣使によって西晋に伝わっていた。太康年間の撰述時に、この情報が陳寿に伝わり「陸行一か月、水行一か月」という「魏志倭人伝」の記述に反映されたのではないか。景初、正始年間の魏遣使の情報は、邪馬台国に関しては、単に「南に水行して投馬国に至るには、千余里。・・・五万余戸可りなり。」「南に水行、次に陸行して邪馬台国に到る。千家余可りなり。」「郡自り女王国に至るには万二千余里なり。」であったと考えられる。その後、太康年間に西晋遣使によりヤマトの大倭の情報がもたらされた。陳寿は、21国の国名情報「次に斯馬国有り。・・・次に奴国有り。」並びに、総括情報「郡自り(ヤマト)大倭に至るには水行一月、陸行一月。」を得た。但し、国名以外の経路情報に関しては、不明であったため「其の余の旁国は遠絶にして詳を得べからず。」とした。しかし、陳寿は、故意か、単なる間違いか不明だが、東限の(ヤマト)大倭に至る郡よりの総括記事を不弥国から投馬国～邪馬台国に至る経路記事に変え、「水行一か月、陸行一か月」で邪馬台国に至るものとした。但し、錯簡は、陳寿に係わりなく後代の「魏志倭人伝」の転写により生じた可能性も否定できないと思われる。

尚、戸数については、奴国を中心とした北九州西部勢力が三万戸余、投馬国を中心とした北九州東部勢力が五万戸余であるが、邪馬台国の七万戸余は、成長著しい(ヤマト)大倭の戸数である。ここでも錯簡が生じている。女王の都は、あくまでも一宗教施設に過ぎず、婢千人程度が居住する小地域の呼称が、邪馬台国ではないかと考える。

尚、大倭は、崇神朝に設置されたとしたが、一義的には、崇神朝とは限らず三世紀のいずれかの時期にあたると思われる。しかし、本稿では239年の魏遣使を契機に近畿勢力が、邪馬台連合国に加盟した可能性が高いものとして論を展開した。邪馬台連合国への加盟が崇神朝でなく、垂仁朝、又は、景行朝であったとすれば、建波邇安王の反逆は、大倭設置に係わりがないものとなろう。

以上が本文のまとめであるが、卑弥呼の鬼道等、論じ残したものが多くと思われる。邪馬台国の興亡史に関して、引き続き探求をして行きたい。

了 2019.4.3

## 補) 道程に関して

陳寿は、「魏志倭人伝」の”自然地理学”の部で各種の境界を示そうとしたと考えられる。倭の地に関しては、「参問するに、倭の地は、海中州島の上に絶在す。或は絶え或は連なり、周旋すること五千余里可りなり。」と記述する。又、倭の北岸(北限)とする狗邪韓国に関しては、「郡より倭に至るには、海岸に循いて水行し、韓国を歴て、乍南し乍東す。其の北岸の狗邪韓国に到るには七千余里なり。」と記述する。倭の南限に関しては、「次に奴国有り。此れ女王の境界の尽くる所なり。」「其の南に狗奴国有り。」と記述する。倭の東限に関しては、「女王国の東、海を渡ること千余里、復た国有り、皆倭の種なり。」と記述する。倭の西限に関しては、「道理を図るに当に会稽の東冶の東に在るべし。」と記述する。

陳寿は、これら境界に至る郡からの距離を総括し、経路を可能な限り示そうとしたと考えられる。経路記述の諸要素は、基本的に国名、方角、交通手段(水行、陸行、渡海)、距離(道里、日・月数)、国の規模(戸、家)である。郡から太康年間時代の倭の東限(ヤマト)大倭に至

る距離の総括が、「水行一月、陸行一月」の記述ではないか。又、倭の四至の周旋が、「五千余里可りなり。」ということであろうか。

#### 参考・参照文献一覧

- 石母田 正 「日本の古代国家」 岩波書店 1970年  
井上 光貞 「日本国家の起源」 岩波新書 1960年  
門脇 禎二 「邪馬台国と地域王国」 吉川弘文館 2008年  
岸 俊男 「日本古代政治史研究」 塙書房 1966年  
平野 邦夫 「邪馬台国の現像」 学生社 2002年  
鬼頭 清明 「岩波講座 日本通史 第2巻古代I」 岩波書店 1993年所収  
「六世紀までの日本列島」  
黛 弘道 「古代学入門」 筑摩書房 1983年  
吉田 孝 「史話 日本の古代二 謎につつまれた邪馬台国」 作品社 2003年所収  
「倭の女王と交易」  
岡田 英弘 「倭国」 中央公論社 1977年  
和田 萃 「大系日本の歴史 2 古墳の時代」 小学館 1992年  
吉田 晶 「倭王権の時代」 新日本出版社 1998年  
森 浩一 「日本の古代 2 列島の地域文化」 中央公論社 1986年所収  
「考古学から地域をさぐる」  
「日本の古代 5 前方後円墳の世紀」 中央公論社 1986年所収  
「“古墳”とはなにか」  
松本 武彦 「日本の歴史 一 列島創世記」 小学館 2007年  
鳥越 憲三郎 「弥生の王国」 中央公論社 1994年  
福永 伸哉 「邪馬台国から大和政権へ」 大阪大学出版会 2001年  
寺沢 薫 「日本の歴史 02 王権誕生」 講談社 2000年  
岡村 秀典 「史話 日本の古代二 謎につつまれた邪馬台国」 作品社 2003年所収  
「古墳の出現と神獣鏡」  
小田富士雄 「古代を考える 沖ノ島と古代祭祀」 吉川弘文館 1988年編  
山本 武夫 「史話 日本の古代二 謎につつまれた邪馬台国」 作品社 2003年所収  
「気候変動からみた「邪馬臺国」」  
宝賀 寿男 「古代氏族の研究① 和珥氏」 青垣出版 2012年  
岡本 健一 「邪馬台国論争」 講談社 1995年